

言葉と向き合う

言葉には力がある。

植物学者 稲垣栄洋

言葉は「言の葉」である。

もともと言の葉は、「言の端」に由来するとも言われている。

古今和歌集で紀貫之は「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と詠んだ。人の心を植物の種にたとえ、葉っぱのように言葉が生まれてくるとしたのである。この歌が印象的だったので、「言の葉」という表現が生まれたのだ。

私の研究室の学生で「言葉にしたことは叶う」と豪語している男子学生がいた。気をつけて見ていると、確かに彼は、口に出したことを次々に叶えて、大きな夢に向かって着実に進んでいくように見える。口に出すことで、本人もその気になるし、周りの人たちもその気になっていく。そして、彼が思ったように雰囲気が変わっていくのだ。

言葉には力がある。

私は、科学論文を学ぶ学生たちに、「しかしながら」という言葉は、それまでそれらしく説明したことを一気にひっくり返すことのできるプロセスのバックドロップのような必殺技だと言っている。言葉には、世界をひっくり返すような力がある。言葉の力を使うと、世の中がひっくり返る。

例えば、「だからこそ」。「困ったことになった、だからこそ、おもしろい。」

他にも必殺技はある。「やりたくない、にもかかわらず、やるの

言われている。

種から葉っぱが生まれるように、心から言葉が生まれるって……すごく、わかる気がする。千年以上も前の言葉なのに、なんとなく今の私たちにも伝わる。言葉というのは、本当にすごいものだ。

同窓会のときだっただろうか、中学校時代の国語の先生が、「おまえは短歌が向いているから短歌をやれ」と言う。私は四十歳を過ぎて、そこそこの地位もあったが、中学校の先生の前では坊主頭のままである。それから私は興味もなままに短歌を始める羽目になった。

しかし、短歌をやって気づいたことがある。「今この瞬間」を永遠に残すとしたら、どのような方法があるだろうか？

例えば、美しい夕暮れを見たときや、赤ちゃんが初めて歩いた瞬間を、どうやって残せば良いだろうか。写真や映像で残す方法は確実である。しかし、フィルムの写真や、ビデオテープは劣化してしまうし、デジタルのデータが永遠であるかもわからない。しかもどんなに映像を忠実に残しても、

「思うようにならない、そこがいいんだよね。」

こんな言葉を使っていると、何だか困難続きの私の毎日が、そのうちドラマ化されるのではないかという気にさえなる。

言葉は人を勇気づけたり、力づけたりする。しかし、あるときそれは……人を傷つける。

私はサラリーマン研究者から大学の教員になったこともあり、学生に気軽に軽口を叩いていた。しかし、学生にとって教授の言葉というのが、ときにはあまりに重い存在であることに気がつき、おののいた。何気なく放った言葉で、学生たちは輝いたりもするし、へこんだりもする。言葉というのは「諸刃の剣」だ。

なんとという恐ろしいアイテムを私は身につけてしまったのだろう。

魔法の剣や、秘密の呪文であれば、使わずに平凡に生きていくこともできるが、言葉は使わないわけにはいかない。

言葉には力がある。そして、私たちは言葉をもっている。

そのときの自分の感動を未来に伝えることはできない。

ところが、例えば自分の日記を読んだときに、その場面がプレイバックすることがある。同じように、私の下手な短歌でさえも、読み返すと、そのときの情景が思い出されるのだ。言葉にはそんな力がある。

そして、紀貫之の和歌は千年以上前の作者の気持ちを現代の私たちに伝えるのである。

言葉というのは、時空を超えるタイムマシンなのだ。

言葉は「言霊」である。

科学者である私が、こんなことを言っただけなのだろうか、私は「霊」の力を信じている。その霊とは「言霊」である。

不安なとき、困ったときも、「大丈夫、大丈夫」と繰り返せば、だんだん大丈夫になってくる。「大したことではない」という言葉を繰り返していると、大したことではない感じになってくる。言葉には世界を変える力があるのだ。

正しく使えば、それは世界を変え、新しい世界を作る力さえもつのだろう。

言葉は恐ろしい。そして、それを使いこなすことは、とてつもなく難しい。

いや、今こそ魔法の言葉を使うとしよう。だからこそ、言葉はおもしろい。そして、おそらく、そこが言葉のいいところなのだ。



稲垣栄洋

1968年静岡県生まれ。岡山大学大学院農学研究科修了。農学博士、植物学者。農林水産省、静岡県農林技術研究所等を経て、静岡大学大学院教授。専門は雑草生態学。農業研究に携わることから、雑草や昆虫など身近な生き物に関する著述を行っている。著書に『面白くて眠れなくなる植物学』（PHP文庫）、『身近な雑草の愉快な生きかた』（ちくま文庫）、『生き物の死にざま』（草思社）、『大事なことは植物が教えてくれる』（マガジンハウス）など多数。光村図書中学校『国語』1年「アイコンは大きな根?」筆者。